

「動物愛護もほどほどに」

夕刻やや遅く、薄暗くなった近所の道を散歩していると、手押し車を押している若い女性に出会った。よく見ると犬の後ろの半分（後ろ脚）が載っていた。しばらくすると今度は赤ちゃんを抱いているような女性に出会った。しかしそれは子犬であった。それを見て今の世の中を反映している思いがした。最近は着物を着せたり、腹巻を当てたりしている犬をよく見かける。私の年代の常識からすれば、子供の歌にあるように、犬は雪が降れば喜んで庭を駆け廻ったりするもので、野外の動物である。家の中で飼うのは想像できない。家のなかで犬の毛だらけにならないのであろうか。排泄物で汚したりしても気にならないのであろうか、経験がないので、いらぬ心配を試してみる。

我が家では厳冬期でも犬は屋外の犬小屋で寝ている。風邪もひかずに元気である。

猫はネズミを捕るために家の中で飼われていた。炬燵に潜り込んでも黙認していた。

近頃の猫はネズミを見ると逃げていくそうである。現場を見ていないので本当にそうかは疑う。

犬を家で飼うようになったのは欧米ではそれが当たり前になっていたからではないか。

その習慣が日本に持ち込まれたように思われる。

彼らは家の中でも靴を履いている。清潔不潔の観念が日本人と全く違う。

5年前の当協会誌新年号に手術室のスリッパについて書いた。手術室でスリッパに履き替えるのは、家で靴を履かないのと同様に日本の文化であり、絶対に守るべきであると。

結論から言うと動物愛護の精神がそれほど強いのであれば、それが人間愛に結びつき、自分の子供だけでなく、他人の子供にももっと気を遣い、声をかけてあげたりしてもよいのでは。また欧米ではよく見かける里親になってあげられないだろうか。親のない子供をあずかる養護施設では里親の希望者が少なくて困っているそうです。子供は社会の宝であり、社会全体で育てる気持ちがほしいものです。

兵庫県民間病院協会 副会長

尼崎中央病院 理事長 吉田静雄